



古今亭談續編

茶の旬日冊

浪華書林 五堂合梓



古々あほ二下種は。逸物の為延享の初に
 宿成らるを。頃よりてを梓を好まをを
 計るにしをせきや。もう乃をハ英と
 胸りぬる秋ハ志げくと。荒海ありと。尚
 梢ハ況てか。も。予お字する。指枝の序り
 と無く。梓の殺と既。備り思。梓す人の名へ
 多れ。罷。業なき。突れし。東。書。心。色
 こまよ。何。も。お。金。何。を。ぬ。前。続。た。め。
 端。を。口。よ。と。托。言。す。思。ひ。こ。や。右。作。年。波。を。後
 親。子。の。こ。も。此。を。興。る。と。好。喜。ひ。何。様。と。云。を

英華書林 續編序

五

省れえ。古き薄皮の冬へ小珠の冬乃きとこ。
のむら。梵典に孔雀の東恩ひ。神とてあの雲
降る石も。それを連の文に足せし。人の橋
隙を窺ひ。我程よほて後に大海お投さん。土生も也。
此もも早く空言の懸を起り。初み奉く後又甘む
ずる物より着干見えたり。そ程をぬく。漱して。
元の胡の作りはるる。人の習ある。梁山西
おの万長も。展たれば。大津國に。禰食の時
代も。ある。展たれば。彼より三百葉の前。日本紀の
さへ。ある。およりあり。浮浪して。及學の。鬼子の

眼を掩りて。そ風を疎ら。隠くを。隠す。博
古の。鬼子も。洞うなる。世を。新。さ。ま。ば。つ。実。を。掩
て。掩も。あら。ぬ。枝と。葉を。枝。た。る。偶。言。ハ。歌。人
の。眼。界。等。よ。と。地。師。情。ハ。落。る。と。ま。る。屋。お
塚の。後の。冬。も。は。え。らの。伝。を。傳。え。男。と。あ。り
神。種。と。し。神。代。の。り。た。と。糸。と。結。と。て。結。を
と。り。藤。小。枝。娘。乃。巧。命。を。淫。色。と。あ。り。た。間。就
池。ハ。今。橋。と。河。も。多。れ。堤。系。ハ。衣。子。鏡。と。あ
り。人。柱。ハ。終。子。時。あり。時。路。の。乃。ま。枝。と。あ
る。お。程。程。ハ。律。渭。ガ。四。夏。精。と。結。ひ。習。う。情。を

南なん山さん若わ精せい樂らく二に漏ろうすも。古こ人じん乃の唇しん又また華か陽やうさる
石いし酒しゆ亭てい。王わう位い山さんの邊へん磧せきハ。むろし。其その地ちをを聞きり
文ぶん翁うんの親おやしく。信しんををき。緒お條じょうをを繼つり。安あんえたり。
た。是この信しんと。言いふ。陸りく沈しんめる。其その世よの。自みづか然し又また亂らんれ
者もの留とどめ。心こころの使つかふ。小こ刈かりせむ。や。言いふ。夜よの山さん茅ぼう
の敵たひ小こを。路ちと。と。免めん。歩あふ。信しんををる。さ。へ。也なり。其そのを
楮か日にまで。梅うめし。て。字じを。信しんををる。謂いは。して。羊やう
草そうも。標ひらせ。る。也なり。古こ来らい流りゅう。と。生なて。ふ。名なる。也なり。名な免めん。

天てん的てき矣や外がい姓せい冬とう十じゅう子し獨どく笑しょう題だい



古こ今こん奇き談たん著しやく句く冊さつ惣そう目もく録ろく

近きん路ろ行ぎやう者しゃ 著しやく

千せん里り浪らう子し 正たす

第だい一いつ篇ぺん

八はち百ひやく比ひ丘きう尼に人じん魚ぎよを。放はな生まし。て。壽じゆ紙し益えきと。話わ

第だい二に篇ぺん

小せう野の阿あは。磨ま誦そ戲ぎと。譬たとて。等どう法ぽうを。説せく。作さく

英神代の書目録

第三篇

求冢俗説れ異同冢神の靈同答め話

第四篇

玉林道人雜談して回改を屈する話

第五篇

絶間池の演義強頭れ勇衣子の智あり話

第六篇

吉野狸く人間に遊て歌舞を傳る話

第七篇

大高何某義を属し影れ石に賊射る話

第八篇

猥瑣道人水品を辨し五友れ音成織る話

第九篇

白分れ翁運し乗して大に発跡する話

以上九篇

古今奇談莠句冊第一卷

一 八百比丘尼人魚放生して身を益を詰

壽福八人の慶美不費て保つべく招くゆへとも先言わはは漢土より仙人と名わらハ家以離山は棲之名山は入る業を採丹成煉る雲物珍慕ひ棲氣を好む早く若生れ人を迷惑し秦の世は文成徐福の道士蓬萊方丈常世此小洲をく東海より来て信を深むる海は其國山は據る人情海島成希掃とらる因らなる後宗古以老子は混て混る道家と稱し。道場を觀と名つ。佛家此寺の如し。位持とらと真人と稱む。三清乃像と役多。老子河をくると釈迦の奉は同一。法事供養と醮祭と唱へ神將城石の急急如律令ハ漢の世は友府語なる。其地業よく密教を秘ひて授らる。實表裏と互遠するや。仏は西を往つるの地とらる日月れ没ら不は混る。道はハ生發成る故に東海を企望し傳は又た小因らなる。道家之漢の

天ハ三三樂界ニ準一過ハ有と為る界佛ハ無を示して往く其有ハあり
 臺城と云く無ハ伍りよけを従くは。そ亦ハ洞又霊地の別所を設け進達の
 仙賢階級してゐる不十。そ道經仙籍ハ古代ハ陰道陽方ハ八家雜子共
 引の十家あり石室洞穴の秘苑ハ仙傳ハそ圓現傳へそ書あるも多クハ
 擬撰あり黃帝れそこより藍葉和の乞婆よりして。そ亦ハなるりの
 仙ハ列女王母ハ妖ハ似つ狭揚ハ似く仙人の樓閣ハ画图をみるもそ亦
 多ク李白樂天のそひよぬ類も仙傳ハ收め録して多ク。道ハ傳る中
 葛洪洞賓思邈ハ皆撰りて具服の偉人なり仙家より強ク吳法深
 摺りき却り其人を疑ハ一むそそ葛洪ハ八十一遠く去り師を尋るや
 托し思邈ハ百餘りて無何有れつ遊と告ぐ。只そ終焉城稱せざるが
 そ宗るれ常例あり。まして葛の抱朴れ言よ云。かありりの流るも生を悪
 せん。周魯れ聖人ハ己よそ及を知らず。今仍死せざるべし。世の人皆

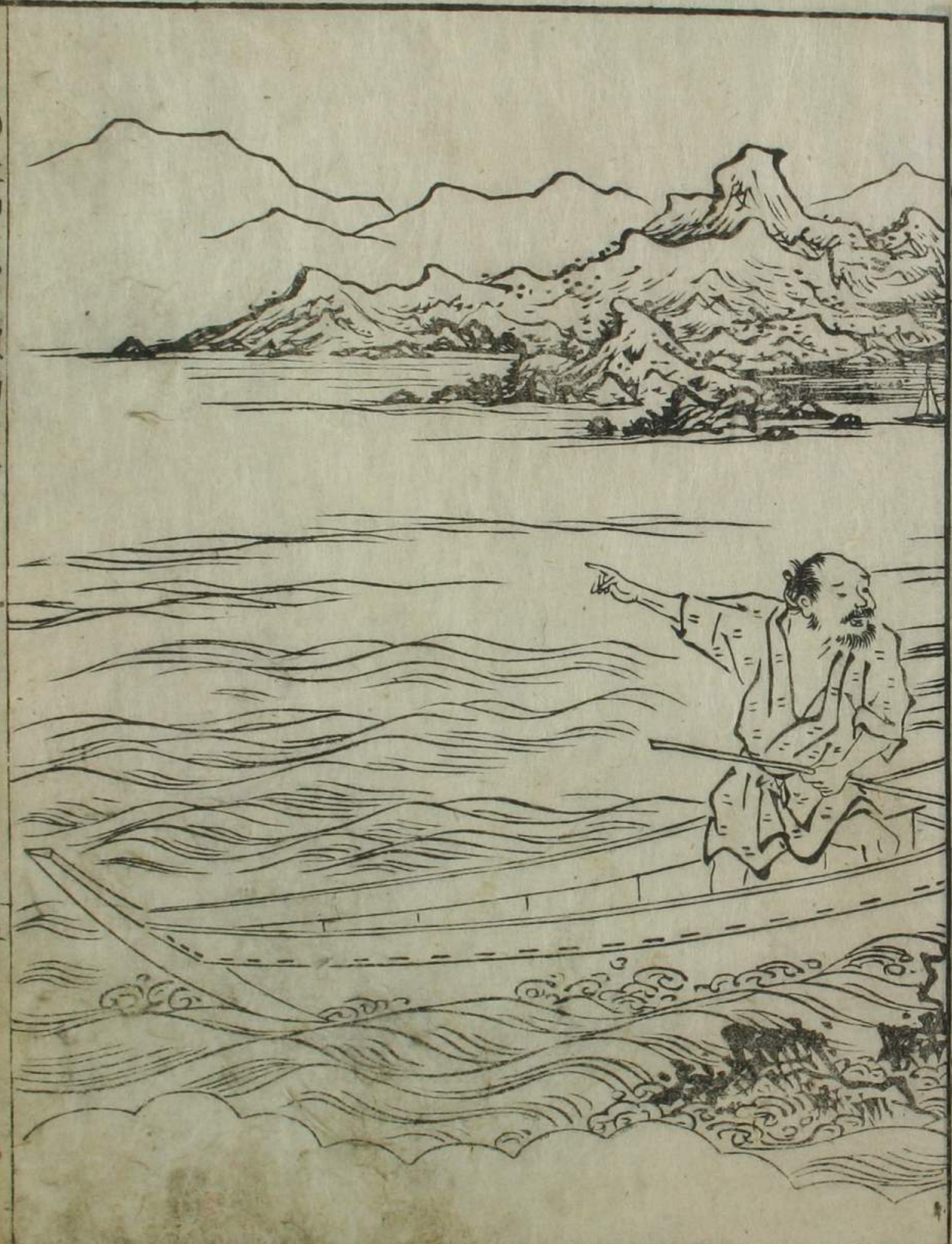
不死の道を知らず。子孫の國城なき。忠孝を思ひず。必し人倫を失ふ
 故ハ周魯密ハ自用し秘して人よ告ず。是皆道城を張るの巧言今
 此ハ國神ハ本地を合とるが如く。其一見識して言及せ。言へるよ
 あり。汝の教さや。人乃建立して。乃ハ大道小徑共ハ便よ。女城
 仍あり。そ小遊くあり。一曰せ。ね不天。乃ハ大道を。一曰。偏人と
 せ。人事ハ妨礙あり。豈小々あるや。謂る。壽ハ書生よ。か。今よ
 得と不得あり。福ハ功勞小より。て。留れ成と不成とあり。二つとも。貴ハ守
 らば。天然を失へ。人。又百業。れ上よ。久し。け。失期の妖。同と。例
 其名をおぼせる。得人の故態なり。彼老子ハ道家の一流。て。言なく。傳
 する人の書あり。今。又。千言。ハ。古より。青牛。ハ。大國。ハ。漢。と。神
 仙家。流。ハ。東方。ハ。福地。を。養。作。徐。福。野。と。有。れ。由。來。起。又。本。朝。ハ
 神。ハ。仙。人。あり。實。ハ。仙。ハ。桃。桃。ハ。今。の上。座。なる。べし。人。九。皇。

都良香も収つて悦ぶや笑ふ。法道の祈を飛たし生け御まう之仙
 の雲頭を落るとい道人れ肩を弛るあり。是等いふに仏教傳の不可
 思議流して西王母れ脈脈いあはるる。こゝに飢えど寒くぬれ
 奉る衣食の欲無く世に離るるをり。服業をけきても病なく。滋食
 せのども妻へごらひ。是こそ地仙こそ。楞嚴十種のつたるべし。人の言と信
 こそ人を欺くいふる言かな。冬寒く夏暑くこゝに祈り再を側てん。長
 江の欽明の御宇と名。若狭なる小浜の漁人朝夕は往來三方此海哉。
 四方吹風は放さきく方格を失ひ波は浮いて三日許の波の嶮は
 飄然と岸より上りていさくりれ小浜もなき。海は臨んで鯨をみる大門
 巍然と海を生活身の放さきこゝにいふ島も夢はこゝれどとい
 いて。彼竹生島よととと。海路長ならん。色よのれと。かたがす
 歩くよんべ朱門碧瓦金字牌。少女宮の字あり。一人をみる結髪
 れ上よ。透るる胃の。たるが。漂着を懐く。引く樓門の内よ。初し
 む。一殿の結構磚梵玉のめく。水草の文は雉。五采巖花飾り。万像を
 鏤じ。飛禽翼を流る。遙は上楹は翔る。蒼い七老の念なく。を歎吉城
 吐く。高く危椽は相逐ひ。隆煙のまき。千門万户は壯麗一れやうと
 一境諠色すえず。漁人競く。階よもんご。席をゆ。食膳はね
 象箸は把り玉椀乃内城えらる。犯美しそ人肉は似る。ハ漁人許す
 箸を下し。かひたり。庖人とと。さかえ。是は人魚肉あり。翻放して公膳
 を苦しめる人。是を喰へば力常小返る。若くは島主剛愎のなる。不也
 と。漁人すて仍喉より下り。かひ。番頭をこゝに吸く。梁飯を食し。内
 を包て懐に。周已に空く。恩を謝し。舟は回る。門者送る。舟
 れ向ふ。方格を指し。漁人指す。方格見やう。後をかつ。人魚の
 其人氣もあふ。もさく。渺々蒼海を際知る。夏うと。行は速し。

れ上よ。透るる胃の。たるが。漂着を懐く。引く樓門の内よ。初し
 む。一殿の結構磚梵玉のめく。水草の文は雉。五采巖花飾り。万像を
 鏤じ。飛禽翼を流る。遙は上楹は翔る。蒼い七老の念なく。を歎吉城
 吐く。高く危椽は相逐ひ。隆煙のまき。千門万户は壯麗一れやうと
 一境諠色すえず。漁人競く。階よもんご。席をゆ。食膳はね
 象箸は把り玉椀乃内城えらる。犯美しそ人肉は似る。ハ漁人許す
 箸を下し。かひたり。庖人とと。さかえ。是は人魚肉あり。翻放して公膳
 を苦しめる人。是を喰へば力常小返る。若くは島主剛愎のなる。不也
 と。漁人すて仍喉より下り。かひ。番頭をこゝに吸く。梁飯を食し。内
 を包て懐に。周已に空く。恩を謝し。舟は回る。門者送る。舟
 れ向ふ。方格を指し。漁人指す。方格見やう。後をかつ。人魚の
 其人氣もあふ。もさく。渺々蒼海を際知る。夏うと。行は速し。

風は去るかい浪は托すこと三日をかり。天は河原よりやかるともよも
遠なるをれ浪はよもぬ。是こそい遠敷れ那なる。ふも初てより遠よつて
よもゆ。家よ帰まの妻子遠きて恨み程よ。飄風の聲はかろ。懐の
肉を出して是足よつて。時よ女子れ十歳なるが珍味としてよく食
ひます。能喰うると奥して事さぬ。女子其はより漸くと健よ。病苦
病苦を。心意快極改るがめ。是ならん年長とこれ兆とさつ。北とせ
るもよも嫁しやくとけさる。い漁人既よ百歳れ後の姨と鳴きて。
七十八小いささどや見えや。面貌白皙よ清くなきと。艶媚の婦
態あるとなり。日こにまをく。清潔を好む俗塵は厭よ。里人目て白
比丘と鳴よ。時改まとも身衰つど。家小いしてこそ幼年よ父乃よつ
一仙肉の語よるといふあるともあり。延長三年醍醐帝痘瘡の漸
収よ。験の老よ。内緒の病念せ。比丘尼が除抜の符よ。若狭よ。四百

歳の女とさるるといふる。年改ええ。其よりい星をねをもねへど
後の住居定めど。他國よ移といへども常小をよま在るがめ。その高
濱よ。是魚の古よ。ばらる。其頭の人面よ。眉身体をり。
肉白く髪赤く長し。紅鱗の面よ。あつ。指よ幕蹠あつ。下は身い魚
形なり。大魚よ。函とてとんそ。磯辺よ。潜よ。清湾よ。滞りく。きる事。如
ゆ。漁人水中よ。乾く網にせよ。入きて圍よ。飼よ。け魚時よ。け水より
出よ。涙はたき恩をよ。似る。漁人等云。是正しく人魚なり。食て長命
を保つとす。肉を分ち價を高く賣らんと人か。と募ら。富有れ。家
は。賞んとも。訓ぬ。食ふな。色は。た。め。ひ。く。白比丘尼よ。人魚服よ。とる
と。人。の。彼。人。よ。向。て。真。偽。を。定。め。て。は。賞。ん。と。い。つ。浦。人。は。丘。尼。よ。告。て。
肉。分。ち。と。ま。う。せ。ん。人。定。め。給。ひ。ま。と。い。つ。姨。姑。の。戒。禁。を。ち。り。し。も。
あ。ら。び。幼。年。よ。食。し。て。味。も。よ。め。れ。ゆ。ま。い。今。一。つ。び。食。せ。ん。と。言。ひ。し。高



濱よりつて見るに、け魚濠躍り、びをきけて、姨姑よむかひ海を流
 と事珠のぬし。姨姑をよむ中う。け魚必む肉がたきん憐むつと
 ことなる。地仙とがるもの、一千三百れ、吾事をなむと、つて未だ施
 さず。我は汝命よと究て、年を延ぶとも、知るべし。いりうりて、放
 ちゆきせんと。浦人よ向く云。我、幼少の時、異魚の肉を食し、これと
 人界よいづこそ魚をえんず。名は、く、地是なる多し。山生とよぶ魚、
 鯨魚なり。そ、微小なる、守宮、と混じやと。海法師の鳥、絨乃、魂よ
 し、脚よ多子あり。鼈、れ、入道、の、鰻、あり。今、け魚を類して、因、と、是、と、い
 是、を、も、人、魚、と、い、皆、其、れ、鯨、魚、よ、い、あ、い、ん、但、一、鰻、よ、牝、牡、あり、晨、旦、の、魚
 れ、を、む、と、河、海、を、か、く、ず。海、辺、に、人、牝、牡、を、ゆ、て、大、池、よ、昔、の、交、合、す、る
 一人の、ぬ、く、子、が、生、む。け、魚、越、る、に、牝、なる。丸、服、食、の、牡、雄、の、肉、よ、非
 ざ、れ、い、益、を、し。味、も、美、な、ら、ぬ。我、の、命、よ、と、念、を、し。浦、人、く、必、す、用
 かせよ。け、魚、越、殺、さ、い、牡、魚、越、る、摺、極、く、衆、魚、を、驅、り、て、大、よ、漁
 網、の、害、を、し。近、辺、の、浪、困、窮、よ、及、ぶ、べし。今、け、魚、よ、牝、へ、け、浦、れ、漁、利
 多、り、し、ゆ、よ、と、て、放、さ、い、却、て、一、郷、の、洞、色、を、る、べし。と、か、る。浦、人、も、
 且、ど、ま、と、依、り、て、便、ち、魚、よ、向、い、れ、を、放、ち、中、う、け、亦、猶、れ、利、多、か、し
 ち、や、し、り、大、魚、改、を、か、し、て、喜、ひ、躍、ら、中、う、あ、る。や、が、て、因、網、を、去、て
 け、ま、い、り、く、濠、刺、と、を、り、て、汝、を、よ、入、り、し、ぐ、さ、い、浮、て、汝、を、け
 浦、を、る、る、己、う、り、て、そ、月、よ、り、け、地、の、獵、業、大、よ、益、を、し。浦、の、人、魚
 小、松、原、の、異、折、翹、ま、で、も、多、く、う、た、れ、い、浦、人、い、り、く、け、丘、尾、よ、信、を、な、む
 姨、姑、へ、三、方、の、幽、深、よ、草、舎、を、造、り、て、棲、け、り。そ、地、の、思、少、年、の、暴、ら
 その、三、四、人、密、に、計、合、せ、長、生、の、人、れ、人、道、い、や、ん、な、る、試、よ、と、け、丘、尾
 往、来、れ、道、よ、當、て、常、に、伺、ひ、等、つ。一、日、果、し、て、お、と、あ、て、た、太、よ、り、交
 と、抱、く。け、丘、尾、教、も、驚、く、す。あ、れ、服、よ、袂、て、ま、る、と、疾、風、の、よ、く、流、業

此悪女退へども退及むを。比丘尼を人をかゝるなぐ海の中へ飛入り
俱に沈んで見えず。実や大海死尸の容を。明朝悪女の悪尸を干渉し
お奉り。悪少の家より守護の術へ物より及んで。尼姑のそのよもけ
ふも庵に静坐して居るも是れ知る所と。溝をよこさう同ふ旅
ならぬ。比丘尼は同窮むさうもあつた。後にも悪女等は比丘尼の害
をあらわし。いさゝか強りき。白比丘来て挿て海へ入る。け故る畏て
仇するものか。背言して謂人あり。世に安んず。魚類も脩煉久しけ
まは尾脱し。鱗鬣落て人身に化すといへ。比丘尼即ち人魚の精を
ろやと難治をさど推りかつ。百年の歳よりして後醍醐帝も朝
の号諡を授て。昔符をとり時の帝諡は同一と云ふ。又四百年
の強多うと人も知る。け時大に信せむ。長生のを得る人ありて去
老君の言は谷神あり。呼吸をいさぐれいさぐれ。け故る。是れは。是

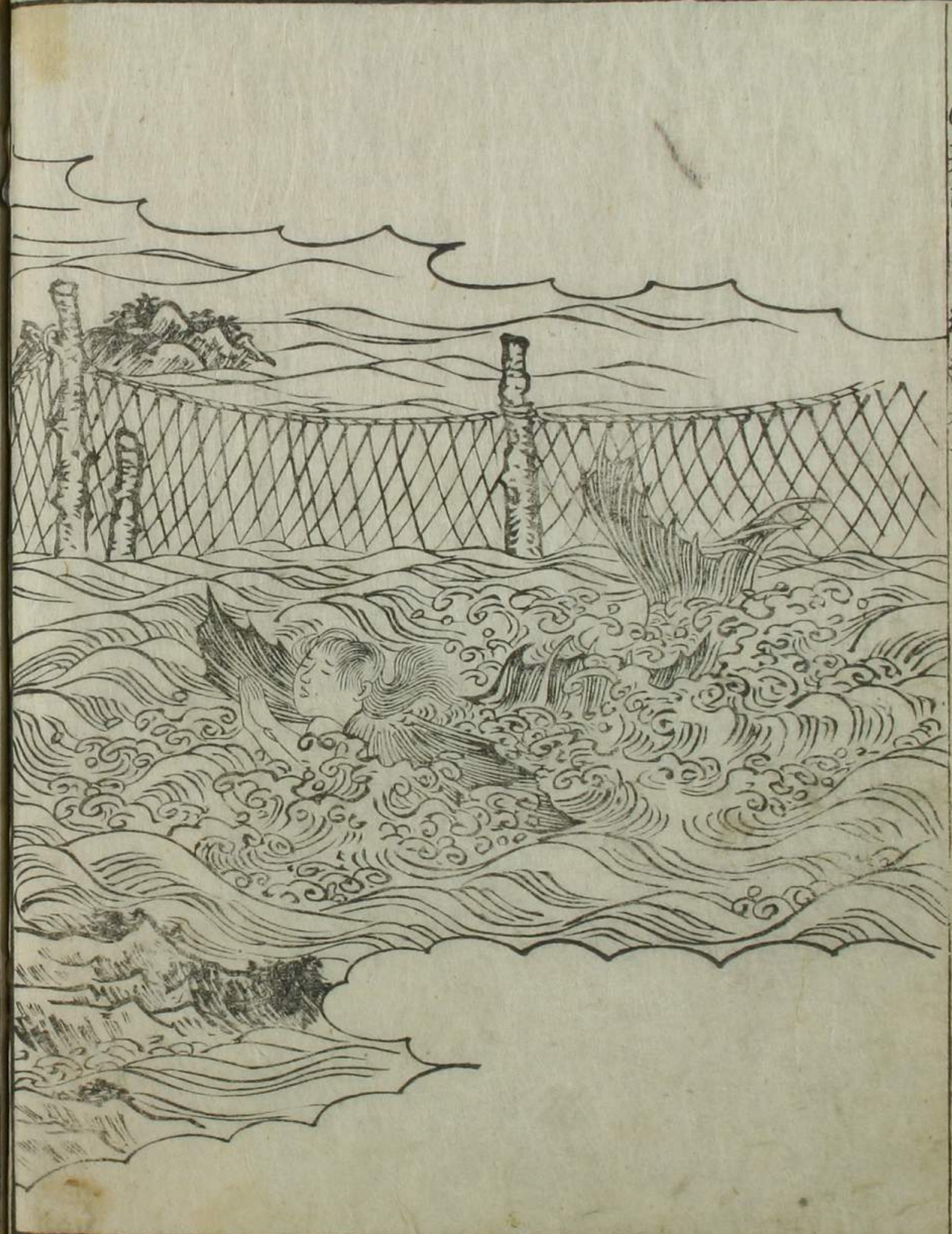
谷神不死とて長生の訣とせらる。取つてや。姨姑云。老君の言は。学さ
ま。我志く。山谷の無動。此物。人身の活動の物。人動り。人へ腐せ
ん。谷の物を容れ。吾々の不谷神と。神を吾々の言ふ。よもこと
急とたよへ。あじ。神を吾々の外。長生の訣。俗人の教いと。人
れ。教いと。表裡をれ。長生を。よも。は。是。よ。へ。あ。ま。い。さ。な。う。我。け。浦
よ。生。れて。網。は。禁。か。く。際。細。さ。う。の。禁。利。の。お。よ。い。わ。い。は。是。を。り。て。は
の。豊。あ。る。を。知。る。貧。國。より。福。地。と。指。て。人。々。坐。あ。が。う。仙。人。なら。ば。り。
を。錢。し。と。仙。居。い。ら。り。て。を。わ。ら。ず。但。し。我。の。こ。な。ら。ば。長。生。は。人
の。性。質。より。別。わ。ん。無。愁。無。病。一。外。一。節。食。丸。を。服。す。る。も。因。べ。り。
す。と。こ。こ。ぬ。ま。う。こ。こ。こ。小。浜。の。土。地。後。の。ま。よ。若。う。橋。な。く。て
仍。人。常。は。掲。げて。流。る。是。よ。石。を。架。さんと。希。へ。も。庸。易。あ。ら。ぬ。と。こ
て。久。く。黙。し。ぬ。姨。姑。傳。へ。て。云。我。お。苗。の。石。を。人。定。め。ま。う。る。日。並

好む時より戴て架べしと。さき成り人皆裁言と云う。此
を去ること四里をかり遠く和田といふ。平盤の石ありて壁
なり。姨姑常よりけ石の下に坐して抱く。改を地より叩き
言ふ。近きより位める人其故を問ひ。云。同くも昔んと云う。け
石能言よと言ふ。承け地を興旺あり志ゆんと云ふ。ゆ徳れ
か。我を擯きく小漢の掲げり架といふ。そこはけ行人脚を
す。後来より限らざる利益あり。左ある時けを福地となん
と云う。法人方便をめぐすべしと云ふ。人の勤くこと常
把定
なす。和田に土人比丘の言信。即日石の下に群り工夫を用ひ引
めらじ。送石教より力を合せてあるの事。小漢より移す。彼漢より
架す。鑄く適らると云う。姨姑悦て我教石を戴て。遂に小
わすぬと裁れらると云。け比丘の終るを知る人なく。を棟とて空屋高

此跡今もあり。長生彼がめさしこれ久し。抱えしけさの靈ありやそ
仙へ知れ。古くひむりと訓せらる。秦國の餘風あり

二 小野此阿津摩誦教の壁言へて筆法を説く話

草體の假名國字と云う。わ。そ。役。官。なること。此。變。あり。じ。
性。右。遣。使。具。て。抱。ま。び。唐。古。入。り。と。教。へ。し。と。我。勝。は
言。ら。れ。ど。け。大。國。の。彼。古。り。勝。め。ら。る。小。事。を。い。く。海。す。ぐ。い
弘。法。大。師。生。貨。の。能。書。す。彼。土。は。筆。法。を。い。く。る。殊。文。なる。世。は
三。跡。と。並。べ。稱。を。い。く。絶。倫。の。氣。な。ら。り。別。て。通。風。る。り。の。は。高
名。と。能。せ。れ。人。を。去。し。中。法。は。小。野。と。名。の。り。人。に。や。し。い。づ。ま
徳。あ。る。人。の。氏。族。久。し。い。血。脈。の。こ。い。わ。じ。筆。の。た。好。め。る。人。の。流。し
き。し。や。あ。り。い。り。繁。榮。の。地。は。小。野。静。ま。と。能。書。あ。り。通。風。の。心。し
と。筆。法。を。悟。り。筆。體。は。妙。は。一。揮。三。五。字。筆。勢。を。失。く。ば。漢。土。官



府署寺れせけを能きえ。是城家の法則とす。を古今の法せよ
 教へ入てい。惟け人成とと評するも其譽よいあぶらべし。それが牙
 子丘下阿津磨とて女等あり。性ゆ華麗れ黒あり。教を執て絶妙よ
 ける。女流を師としてその人柄よく心懸く。その人の量よ應じく鑿
 本城の厚くゆ急よ。あふ人をそとく。その門は市成なり。常に才子
 よさくして云。おの道着を折くうけ通の妙といのう。三島の社よ集苑
 す。通夜のみよ。白日とよふが冥くなる。その間よ忍ろく。蛭蛇初る。屋
 曲しく宛伸を勢ひ定ぬふ。其状眼よ空るとわくつをこまして晴たり。
 盤辺結ひる神人出来て。筆れはゆるやと同よ。愛心よ敬して云。只
 畏怖て尺定ゆゆとと各けきい。神人よ友あんとよ。さうごくや。只
 けくまがらうと尺定ゆ尾ようねう。伸るる所の勢も息もれ。取定め
 がく活抱の妙よ工夫をせよと。おの道けよ之よ。彼偶龍を弄する者い

よく今得して今又する勢いをませり。形容空るざるを終とせれ。初
 二法を立す。後よ法よ細ゆれぬ時。成就とすや。今其法を
 けくめめんと扱へし。時よ神人袂より大の鱗一片とえおし。く
 是とよ根へ平うして既九とよ似て積土の形あり。是を三稜なる
 のよんえとらうが法あり。滑れ蔡邑楷正の字成工夫して。石室よ異
 人よ扱るとと枕せし。素幅の方正ある物なり。斜角は扱をい。等
 以下すの法よ立る。是等よ做ひ。後世よ巧者の人擬造して。規矩れ二
 折を借る。圓さ正申よ三稜規成入とく。三つは断。内の斜角と楷
 其の法と。外の之拘乃一拘をえて。法とが。是昂ち上代の假名
 法よ落荷とて蓮の花辨の散て。其窩とるる。後新月の如くなる。是
 を幾つと連る。鑿け法として。古人の字形を考ふ。本原の旨は。か
 一。飛仙をまかすよ。本朝に能くよ。三跡の文なる。兼め玉を因玉の

んもくまらにちきくろ筆山寺此行成なりおいはひひは似るも
及いぬおほく人めり。文字ちね壺夷も法と事疑ひる。かく云
我の作が怒がる幸魂の神凌は影かりるそと示されてより。現はけ
言成志ます。好けら人そ興しと笑ひも志けりんと。常は郭云せり。其
門下業を交る女師。まゝ小僧姓を許され聰と叫ひ通と字なり。遊君の
野風は雅名なりね。まなとよくと書きいそ。又一派の教へあり。とて
れ字記美に偏きい筆勢脱け。魂は偏きい欽とかく。一字れ内は美魂
ありといふも辺と魂と。旁はみよなりすもあはれ美魂を互に筆
へせて筆はよほひ字をなす。みい易くして勢は美ひやく。魂はな
しかくしてよく。氣家誠書。一字い美。一字へ魂は交へまやと
え遠ひるもあり。色へは人の假名い筆終れふ字まで。片假名は對
して九かるともり。字の内はまよと。筆終をらんぞれい字形は杜撰

あり。字形をいふも字勢はゆるれい氣とつづるべし。筆勢の活動い
けは却都の踊りとて。戲をけりつ。是を筆勢の徳と習ふべし。田
より起りて舞の畧といふ。恐る舞の燈筋なり。嬉しく考へ
言ても書えぬ固秀が。氣は志まて邪とさけひ。いまで字もあはれ右
よりい文字を踏むる筆の家おる所。すそ参りあつる。身は三ツ
つとまのいとせたりねも。腰は斜に振る。双脚を外に踏出す。けりかき
ころ時にも。指拍子を失つるも急野が。まても氣と目すべし。それ
一場一周匝の短句あり。粟田松坂も越ぶるも篇あり。先幅紙の廣狭
とせづ。字の大敷を評定て。その場の踊りれ後急に復合せ。筆を執
るる精氣は張て弛べど。精氣ゆるまらる時。間は一度二度。然乃拍
子は差ひても。足とべし。精氣衰せはるる。堪え。たをさすりと
まの右を指し。たれもねんとしていたる出づ。一画をさして後又一画

を却ち申う。その老筆は態よく廉角しくなれば、け態いよとめ
 い足随てす。退けい脚はく近くい辺旁れちなる。その文を
 をたよつて。その強弱人目と違わぬ。其の流もねど。其妙
 意よいつてい。通る人々其人を忘る。腰は態を生む。其妙は流
 きて雅を去る。字は腰といふ。程のすいあり。筆は腕と人の云は
 書もれ興うねりなる。左を先よさう。右は先よさす。其大の類あり。
 田舎の若より拍子となく。字と打を度とす。於今の地は態度後
 小柳揚花。とつ四つれ間。忙しき活あり。左は巻嵐。右は巻嵐す
 い横心連火の字なり。其尖を一一い拂ふが一夜あり。掛いねもす。は
 一。文字いも短き。俣ある態も定めわす。とつ四つと拂ふ其
 り。其あても。心よを節度を含めて勢を脱さず。大娘劍芒のたよ
 も外あり。筆は紙下すの際。或画といふ。字うわんや。又撃あ人の

已は一刀若うとも。其鋒を利くに構て是とてとよとなく。其
 じんい幾いひも斬る。心よ。劍鋒ををん。握す。茶理を敬ぶ人の
 膝と茶七とまごがめく。足ゆは。一。画うて字ね多くも。そ
 始の右を扱。左は扱の所。立をやりて。足踏なわす。心ましく。は字
 能退。一。まごい迂闊。まれば。先よさう。字解。勢を定められて。
 立かるとか。が。心よ。それ方。巻帖。條幅。屏障。長文。よつ
 ア。その自然。序破急。此体。中程。拍子。約束。おて。つ。程
 の下。よつ。ね。人。お。無。の。生。せ。を。発。興。と。な。う。を。志。し
 能。出。の。り。よ。そ。通。り。も。お。の。ま。め。と。田。舎。姫。れ。よ。く。知。づ。さ。よ。い。あ。い。又
 連。綿。と。中。板。よ。織。む。下。か。さ。り。お。ご。う。や。う。れ。好。く。写。し。た。る。終。り
 成。て。い。ま。神。の。甲。斐。さ。る。を。ほ。そ。く。い。ち。ね。さ。い。さ。筆。り。て。や。そ。く。さ。さ
 る。が。み。と。わ。れ。い。ち。ね。さ。い。さ。筆。り。て。か。さ。ら。い。た。ん。を。よ。さ



らん。そのよりまわつてよくさゆつる。いづれ等消てんゆりも。今ひ
とひひと並へるんまは。動て出る所あり。等河運をた帯とつりのわ
りて。中程い離れて。等よの徒さるる所あり。彼等頭は屋伸より縁似と
るかちあらんと。大氏示すと。越あつ。心を用ゝるとこそえらり。のくふ。か
て久しく時めき。仍りさるる。年も積りけし。い。を對も厭へく。今ひ
故つよゆつて。心まよ。生れ。逐人と。多れ。門弟子。は辨別となり。雜具と
知る人よ。也。けり。あつ。餓別の。積り。物宅。充るる。そ。す。い。を。携へて。居位
を。辞し。婢僕。彼。是。随つて。發足し。くる。近江。なる。日。野。の。産。を。ま。い。及。中。よ
て。美。流。と。近。江。へ。岐。づ。ま。を。高。次。郎。と。り。驛。よ。つ。ろ。志。ぢ。く。午。睡。せ
んと。屏。風。志。つ。ひ。て。臥。く。時。の。よ。時。つ。つ。け。き。い。使。女。も。さ。ゆ。う。ん。と。屏
風。の。か。う。何。ん。か。く。ん。る。ふ。耐。野。の。音。さ。く。も。と。て。寢。る。ら。安。常。よ
か。ら。身。初。と。口。ま。う。て。せ。ろ。さ。ま。さ。る。此。者。を。呼。て。足。を。告。げ。怪。し

と心そめくほどに。何は。魔。因。を。こ。ま。う。や。う。て。素。足。う。て。後。よ。か。そ。あ
ら。う。れ。竹。藪。の。中。よ。入。り。氣。も。足。け。し。く。う。藪。の。内。を。探。ま。と。目。よ。ん。る
ふ。か。し。そ。日。暮。れ。も。ゆ。り。ま。ね。ね。指。て。や。く。口。野。と。や。ん。へ。皆。赴
ま。り。く。よ。も。何。も。あ。ま。さ。ど。ま。る。ぐ。れ。家。も。由。法。の。人。も。か。し。か。れ。い
そ。う。し。城。に。く。よ。う。訴。へ。そ。旅。装。よ。貯。の。財。寶。の。遠。く。送。り。し。是。者。れ。料
よ。配。分。し。て。齋。お。し。く。ら。と。な。り。丘。よ。首。と。ら。の。本。來。を。失。わ。ず。か。し。く
も。本。形。を。現。せ。ん。い。流。つ。る。婢。僕。等。人。の。物。を。蒙。ら。ん。を。言。う。ら。や。睫。は
横。て。焦。頓。を。容。る。と。な。り。ま。を。抱。さ。ら。や。尾。を。覆。て。不。朽。を。お。る。あ。ん

古今奇談秀句冊第一卷終

